書評

Gregory Vargo, An Underground History of Early Victorian Fiction: Chartism, Radical Print Culture, and the Social Problem Novel (Cambridge: Cambridge University Press, 2018)



村上 幸大郎

ディズレーリの『シビル』(1845)の中の、貧富の差が拡大したイギリスは上流階級と下流階級の「二つの国民」で形成されていて、両者には何の接点も共感もないという一節はヴィクトリア朝の社会状況を表したものとして有名である。ディケンズやギャスケル、メイヒューなどの、労働者階級の生活を同情的に描いた作家たちですら、その観察者としての態度は"the guise of brave anthropologists entering a subterranean world"(1)のそれであり、彼らもまた労働者階級の生活を別世界のものと考えていた。文学研究者も歴史家も、中流階級の作家たちの作品から窺えるこういった階級間の分断を前提として簡単に受け入れすぎてきたのではないか。冒頭でこう問題提起したヴァーゴは、"The literature and culture of early Victorian Britain look different if viewed from below."(35)と考え、労働者の立場に立つ急進派やチャーティストの作品に着目し、ヴィクトリア朝文学史を捉え直そうとしている。

では、本書の内容を概観したい。各章では、トーマス・クーパーやアーネスト・ジョーンズなどのチャーティストたちの作品のメロドラマ的、教養小説的な要素について考察されている。この二つはヴィクトリア朝文学のキャノンの主要なジャンルである。しかし、その結末で描かれる大団円は都合が良すぎるのではないか、あるいはそこで描かれる中流階級の理想は、実は深刻な問題を内包しているのではないか。こういった点に、急進派やチャーティストたちは敏感であったとヴァーゴは主張する。

例えば、一般的な勧善懲悪もののメロドラマには、特定の悪人にすべて の悲劇の要因が集約され、その人物が倒れることによって主人公は救済さ れるが、社会全体の根深い問題は未解決のまま終わることも多い。『ウィル・ハーパー』(1838)などの新救貧法反対派の立場から書かれた作品では、主人公が慈悲深い上流階級によって苦境から救い出され、諸々の問題が解決する「超展開」("dei ex machina"77)が意図的に避けられており、個人の慈悲では社会の問題の根本的解決にはならないことが示唆されている(79)。また、女性の不貞や貞操の危機などを題材とするdomestic melodramaでは、女性が救出され、家庭に平和が戻って終わることが多いが、ジョーンズの作品では、妻の危機を救うはずの善玉の夫もまた妻への支配欲を燻らせていて、誘惑者ではなく夫の締め付けが妻を危機に晒す場合もある。あえてdomestic melodramaの形を取りながら、ヴィクトリア朝の家庭の幸せの根幹であるはずの家父長制こそが女性を抑圧することを浮き彫りにしたジョーンズの進歩性を、ヴァーゴは高く評価している。

教養小説については、"laureate of labour" (99) と称されるクーパーの作品を扱う第三章で詳しく論じられている。彼の作品は、主人公が試練に屈せずに自助努力を重ねた結果、社会で成功を収める典型的な教養小説とは大きく異なる。例えば Wise Saws and Modern Instances (1845) という短篇集には、自助ではなく他人の庇護によって成功する物語や、地道に一人で学問を身につける過程の中で社会から隔絶してしまう物語、成功を夢見て都会に出て努力した人物が挫折する物語など、反教養小説とも言える作品が多く収録されている。自助努力はヴィクトリア朝中流階級の美徳である。しかし、幸運も不運も環境の影響を受けやすい労働者階級において、個人の努力とその結果としての立身出世は一般的な教養小説で描かれるように容易に結びつくものではないのではないか。クーパーは意図的に教養小説を歪めることによって、中流階級が掲げる理想の矛盾を示しているとされている。

このように、労働者階級の側に立つ作家たちの作品は、中流階級の小説家たちの典型的な作風をあえて模倣して、メロドラマや教養小説で示される中流階級の美徳の限界と問題点を指摘する "experimental" (2) なものであったとヴァーゴは指摘する。しかし、彼は中流階級の作品に対する労働者階級側の作家の反応だけに着目しているわけではない。むしろ本書の関心は双方の作品の間の"dynamic interplay" (41) にあり、マーティノウ、ギャ

スケル、ディケンズといった中流階級の作家の急進派からの影響についても詳しく論じられている。

マーティノウのIllustrations of Political Economy (1832-4) は、救貧法委員会の依頼で、委員会の報告書を基に院外救済の廃止、劣等処遇の原則などを肯定する物語を描いた連作短篇集である。しかし、マーティノウは諸手を挙げて法改正に賛成しているわけではない。例えば"Hamlet"では、勤勉な労働によって救貧院行きを免れた主人公一家の幸せな暮らしの他に、水難で夫を失い、法改正により経済的援助も受けられない隣人一家の悲劇も描かれている。新救貧法に関しては、コベットなどの急進派の活動家たちが旧法の廃止により困窮する人々を扇情的に訴えてきたが、正反対の立場のマーティノウのプロパガンダ的な作品にも彼らの影響により、法改正に対するアンビバレントな態度が見えるとヴァーゴは指摘している。

ギャスケルの『メアリー・バートン』(1848)については、第四章において詳細に論じられている。当時、チャーティストたちが最も力を入れていたのは、労働者たちの教育であった。中流階級は有用知識普及協会を設立し、個々で教養を身につける自助を推奨した。一方で、ウィリアム・ラヴェットなどのチャーティストたちは、教育とは"a means of social struggle"(145)であり、民主主義を押し進めるため、労働者階級全体が団結して社会を批判的に捉えることができる見識を身につけるべきだと考えていた。『メアリー・バートン』における教育観にはラヴェットたちへの共感が窺え、ギャスケルのチャーティスト的な価値観に対する共鳴は従来考えられていたよりも大きいと推測されている。

ディケンズについては最終章で『二都物語』(1859)が取り上げられている。フランスの二月革命以降、中流階級向けの雑誌は、イギリスは「大陸の専制政治や、革命の混乱からの避難所」(208)であり、他のヨーロッパ諸国の混乱の影響を受けない国だとする"island story"(206)を展開していた。一方、チャーティストたちは大陸の革命者たちを自分たちに先駆けて革命を成し遂げた同志として英雄視し、1851年のルイ・ナポレオンのクーデター後にイギリスに亡命した社会主義者たちを取り締まろうとする政府の動きを批判した。『二都物語』は前世紀のフランス革命を扱った小説ではあるが、実際は1850年代の亡命者を巡る情勢が反映された作品であると

考えるヴァーゴは、ナポレオン三世暗殺未遂事件の主犯であり、チャーティストたちが英雄視していたフェリーチェ・オルシーニの回想録がチャールズ・ダーネイのイギリスへの亡命や、ドクトル・マネットの手記に着想を与えていたと指摘する。カートンの自己犠牲によって、登場人物たちはパリを脱出し、難を逃れる。最終的にこの小説はイギリスを平和な避難所として描いているが、ディケンズの"island story"を信じる気持ちと、チャーティストたちへの共感という相反する感情がこの小説を形成していると指摘されている。このようにチャーティズムは活動そのものが下火になった1850年代にも、作家たちに影響を与えていたと結論づけられている。

本書の最大の功績は、これまで等閑に付されてきた労働者階級側の作品 に光を当てたことにある。クーパーやジョーンズに関する章や、四、五十 年代の植民地統治に対するチャーティスト側の反応に関する章は、ヴィク トリア朝文学を多角的に見つめ直させる、大変興味深い内容であった。一 方で、ギャスケルやディケンズ作品へのチャーティズムの影響に関する章 は少し物足りない印象も受けた。ヴァーゴは中流階級側の作家たちは、ラ ディカルな考え方を持つ作家の作品群から相対する考え方を「学んだ」(36) としている。確かにディケンズたちがチャーティズムに関心があったこと は間違いないが、作品中の中流階級の典型的な考え方とは異なる要素を、 すべて労働者階級側の価値観や活動の影響と捉えてもよいのかということ については疑問が残る。実際、弱者を虐げる圧政者への義憤と、暴力によ る秩序の崩壊への恐怖というディケンズのアンビバレントな感情は『二都 物語』だけに当てはまるものではなく、ディケンズ作品全体を論じて分析 すべき問題である。中流階級の作家を扱った章の、急進派やチャーティス トたちとの"interplay"があったと指摘する箇所にはやや強引な面もある ように感じられた。

とはいえ、本書が今まであまり触れられていなかった急進派やチャーティストたちの作品を研究する上で、有益な入門書であることは間違いない。まだまだ掘り下げる余地の残された分野であるだけに、今後のためにも押さえておきたい一冊である。